

雪景色のはずだった。それが、盛岡を過ぎても、平地には雪が見当たらない。三月下旬の東北は、すでに春めいていた。

期待外れ、などと感じることは、土地の人々に対して失礼かもしれない。そんなふうを考えながら、藤村渉は二十年ぶりに新幹線はやぶさに乗っている。盛岡以北を訪れるのは、人生で初めてのことだ。

ふと、渉は二十代後半の日々を思い出していた。設立が明治時代という老舗の新聞社の編集局で、制作スタッフとして働いていた頃。特集記事を書くチャンスももらって、その取材のために東北を訪れ、はやぶさに乗ったのだった。

東京駅で買った牛タン弁当を食べ終えて、一時間が経過している。まだ容器の底がほのかに温かく、五年間に過ぎないサラリーマン時代の記憶も、渉の中でその程度にはぬくもりを残していた。

何も入っていないくせに、いつまでも生温かい器。渉は、それを持ってあましている。窓外に雪景色を求めたのは、記憶も、ままならない人生も、そして旅の感傷も、すべてを雪で、白く覆ってしまいたいという、願いがあつたのかもしれない。

「来てくれたら、ジェームスが喜ぶで」

死ぬ前に、一度でも会えたら。八戸で、飲食店を営んでいる弟は、屈託もなく言った。その素直な感情が、渉を旅に誘ったのかもしれない。五十年になろうとしている人生で、初めて訪れる青森県。八戸はきっと、大阪とはかけ離れた銀世界だろう。

期待は裏切られ、渉は少し残念に思った。だが、旅の目的は果たせそうだった。

二年前まで飼っていたミニチュアダックスフンドのジェームスに会う。十六歳のジェームスは先月、すでに二度も死にかかっている、そのうち一度は、生還が困難な状態だったらしい。獣医が「信じられない」と驚くほどの回復を見せ、ゆっくりではあるが自力で歩けるところまで、こぎつけた。ジェームス自身の生命力、現在の飼い主である弟の献身、そして、何か不思議な力の働きのおかげだろう。

大阪から八戸は、新幹線を乗り継いでも五、六時間はかかる。飛行機は苦手だ。どうしようか、と渉は迷ったが、父の死後、ジェームスをそのまま飼いつづけることが出来ず、弟にゆだねた負い目もあり、せめて最期に一度、会っておくことにしたのである。

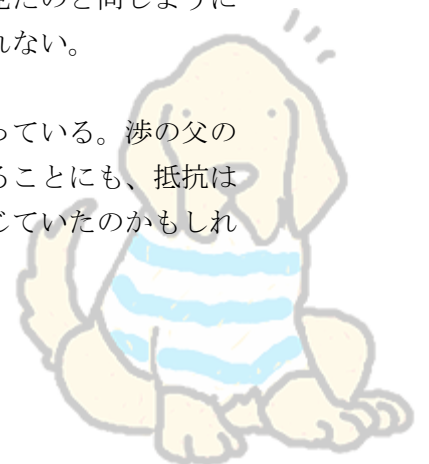
背中を押してくれたのは、弟の言葉だけではなかった。迷っていたある日、渉は夢を見た。夢の中で、ジェームスが静かに、辛そうに横たわっている。だが、よく見ると首がない。ああ、これはもう、本来はすでにない命なんだ。渉は、大きな衝撃を受けた。

目が覚めると同時に、八戸行きを決めた。行かなくてはならない。きっと、ジェームスは自分を待っていてくれる。渉はそんなふうにした。

八戸に着いても、雪はなかった。弟の車の中で、ジェームスは夢で見たのと同じように横たわっていた。当然、首はある。だが、その姿からは感情が読み取れない。

「認知症にも、なってるんや」

弟から聞いてはいたが、別れた二年前からは考えられないほど、弱っている。渉の父の死を、ジェームスは確かに理解したようだったし、八戸に引き取られることにも、抵抗はない様子だった。弟の所に行ったほうが長生きできる、と本能的に感じていたのかもしれない。



車を降りると、ジェームスは自力で歩き始めた。そして、駐車場の出入り口で座り小便をした。雄犬だが、後ろ足の踏ん張りがきかなくなっているのだ。

家にいた頃は平気で渉の前を歩いていたのに、今回は気を遣ったのか、先に行かせようとする。

以前はもっと、喜びも悲しみも、素直に表現していたのに。渉は少しがっかりした。後ろについてくるのは確かにジェームスに違いない。だが、なんだか別の次元にいる生物、いや、生物と言うには何かが抜け落ちているような、存在の心細さがあった。

重い糖尿で、全身の臓器がうまく働かなくなりつつあり、しかも喉を病んでいるジェームスのために、弟は大きなポットのような加湿器と、ステレオのスピーカーに似た空気清浄機を購入していた。病院代、日々の看護、糖尿病に必要な注射など、弟の負担はかなり大きい。

渉とは違って、弟は、昔から面倒見が良かった。人の世話をするのが苦にならない、サービス業に向いている性格だった。生前の父は、非社交的な渉よりも、弟を高く買っているようだった。

「遺してくれたお金を、使わせてもらってる」

弟は、笑顔で言った。費用を半分もつ、という渉の提案を弟は固辞した。兄弟でも、えらいちがいだ、と渉は思った。逆の立場なら、きっと渉は受け取っていただろう。いや、それ以前に、こんなにも手厚い世話が出来たとは思えない。

およそ半年間の歳月をかけて取り組んできた実家の売却が、ようやく完了したのが一ヵ月ほど前だった。相続人である渉の銀行口座には、それなりの金額が振り込まれたが、数日後に四人のきょうだいで分けると、あっけなく散っていった。

弟は、そのお金で、父がかわいがっていたジェームスの最期の世話をしている。渉は、滞納していた年金や健康保険料、税金の支払いなどで、半分以上をすでに失っている。本当に、えらいちがいだ、と渉は再び思った。

もし、売却がうまくいかなかったら、どうなっていただろう。渉はふと、首筋が寒くなった。様々な請求書の中には、財産調査を開始する、という強硬な通知もあった。遅かれ早かれ、実家は持って行かれて、渉は路頭に迷っていたかもしれない。

「ジェームスの費用がもっとかかるようなら、言うてや。早めに言わんと、出せる金がなくなってしまうかもしれん」

苦笑を浮かべながら、渉は言った。まがりなりにも、生活再建に向けて動き出すことが出来たのは、実家が売れたおかげだった。新しい住居は駅に近く、八畳のダイニングキッチンと四畳半の和室、セパレートタイプの浴室、トイレといった間取りは、四万三千円の家賃の割には、かなりお得である。一人で住むには十分だった。

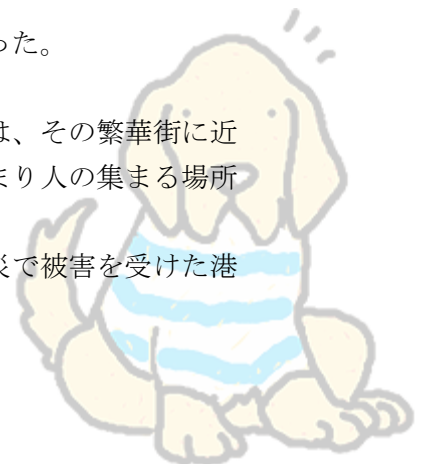
「店は、うまくいってるんか」

父の一周忌で大阪に戻ってきたとき、弟が作ってくれた料理は旨かった。

「何とか、食うていけるぐらいは」

八戸で一番の繁華街は、渉の予想よりはるかに小さかった。弟の店は、その繁華街に近い駅から、八戸線で海側に一駅、行ったところにある。どうやら、あまり人の集まる場所ではないようだ。

機会があれば、八戸線で港に行ってみたい、と渉は思っていた。震災で被害を受けた港



周辺は、いまだ復興の途上にあるらしい。しかし、電車は一時間に一本程度の本数しかなく、隣の駅ですら、たっぷり五分は乗らねばならない、と聞いて、渉は大阪との違いに驚くしかなかった。大阪の感覚では住めないな、と思った。

夕食は、弟が鍋を作ってくれることになった。

「どこか行きたいところがあったら、車で送っていくで」

食材の買い出しに行く弟の言葉に甘えて、渉は銭湯に行くことにした。大阪にあるスーパー銭湯と同じものが、八戸にもあった。地方の色彩や歴史が、どんどん失われていく。だが、それは旅人の無責任な感傷に過ぎず、住人は便利になるのを歓迎しているのかもしれない。

同じようなことは、大阪でも起こっている。毎年二月に大阪城の梅林に行くのが、渉の年中行事の一つだった。梅林の中に薄暗い、古びた店があり、五平餅や甘酒を売っている。そこで何かを買って、梅を見ながら静かに食べるのが楽しみだった。だが今年、その店はなくなり、コンビニになっていた。渉は何も買わなかった。買う気になれなかったのである。

便利さと効率の良さは、常に何かを失わせる。どちらかと言えば、渉は失われゆくもののほうが好きだ。そう思っていた。しかし、こうして地方都市に来てみると、大阪の便利さに慣れた自分に気づかされる。

「六時から七時の間ぐらいに電話くれたら、迎えに来る」

弟の配慮に、バスが分かるようならバスで帰る、と渉は伝えた。夕方から弟は店を開ける予定だったが、渉に合わせて休業にしたらしい。ジェームスの看護で、この二カ月は休業が増え、かなりの赤字だ、という。

一時間半ほど、渉は銭湯で過ごした。日曜のせいか混雑していたが、大阪とは違い、どこかのんびりした雰囲気だった。銭湯の隣に大型の商業施設があり、そこで買い物をして、バス停までの道を尋ねた。わざわざバスに乗らずとも、弟に迎えに来てもらえば済むのだが、方言を聞きたいと思ったのだ。

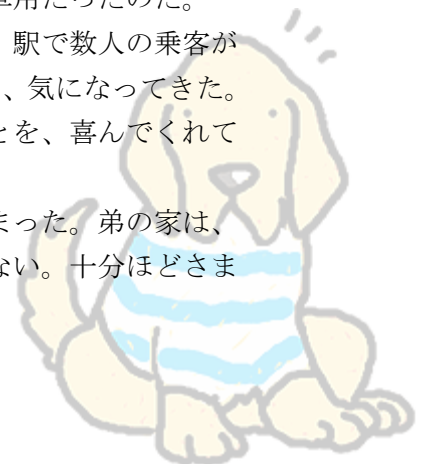
レジの女性は三十代ぐらいだったが、イントネーションを除いてはほとんど標準語で、渉は少し残念に思った。地図を書きかねないほど、丁寧に説明してくれたので、何としてもバスで帰らねばならなくなった。

しばらく歩くと、無事にバス停が見つかった。だが、時刻表を見て驚いた。弟の家の近くに行くバスは、一時間に一本あるかないかであった。スーパー銭湯も商業施設も、車で来る客が大半なのだろう。

幸いにも、五分後にバスが来る。バスで帰る、と渉は弟に電話を入れた。夕暮れの八戸の風は冷たくて、風呂上がりの身にしみた。バスが到着したのが嬉しく、勢いよく前のドアから乗ろうとして、運転手に制止された。八戸でも、前のドアは降車用だったのだ。

本八戸駅や、市役所の付近、繁華街の通りを抜けていくバスだった。駅で数人の乗客が降りると、そこからは渉だけになった。とたんに、ジェームスのことが、気になってきた。はたしてジェームスは、渉のことを覚えていたのだろうか。訪ねたことを、喜んでくれているのだろうか。

バスを降りても、ぼんやりと考えていたせいか、渉は道に迷ってしまった。弟の家は、バス停からすぐのはずだったが、目印の坂道が、どうしても見つからない。十分ほどさま



よい、それらしき駐車場を見つけた。確信は持てなかったが、よく見るとジェームスの小便の跡が残っていた。一直線の、道しるべのような痕跡だった。

渉が迷うのを見越して、小便をしたわけではあるまい。だが、直線の指し示す方へ進むと、ちょうど弟の家があった。

「バス、遅れたん？」

「いや、バス停に着いてから道に迷って。ジェームスのおかげで助かったわ」

夕食の鍋の用意が、すでに出来ていた。この一カ月は夜の塾講師に加えて、昼間は短期のアルバイトをしていたので、渉は忙しく、あまり野菜を食べていなかった。八戸はホタテとサバのおいしい街らしく、鍋には野菜と大きなホタテ、鶏肉などが入っている。

「家でやると、ジェームスが鳴いてうるさいから、店で準備してきた」

食べ物の匂いがすると、ジェームスは吠えるらしい。そして、食べられないのに、欲しがるのだ。

夕食を食べ始めると、ジェームスは、俺も食う、とばかりに鳴きだした。少量しか食べられないためか、普段は弟が餌を一つずつ、手であげているらしい。だが、この日はがつがつと、えさ箱に鼻を突っ込んで食べていた。二年前、実家にいた頃のように。

俺も、まだまだ食えるぞ。

見せつけるかのように、ジェームスは食べた。血糖値は大丈夫なのか、と渉は弟に尋ねた。

「まあ、大丈夫やろ。昨日、注射したし」

こんなに食べたのは久しぶり、ということだった。さんざん食べて、ジェームスはよたよたと布団に行き、ひっくり返って寝てしまった。

「あのまま死んだら、大往生やな」

「ほんまや。満足そうに寝てる。久しぶりや」

この数ヶ月、ジェームスはすっかり夜型で、夜中の二時から六時頃まで、夜鳴きをしているらしい。マンションの他の住人から苦情が来ないのが、渉には不思議だった。今夜は眠れないかもしれない、と覚悟した。長い夜になりそうだ、と思った。

ところが、ジェームスは朝までぐっすり眠った。酔っ払いが、前後不覚に寝ているようだった。渉と弟が朝食を食べる頃になって、ようやく起きてきた。十二時間以上、寝た計算になる。

「こんなに寝たのは、久しぶりや。嬉しかったんやなあ」

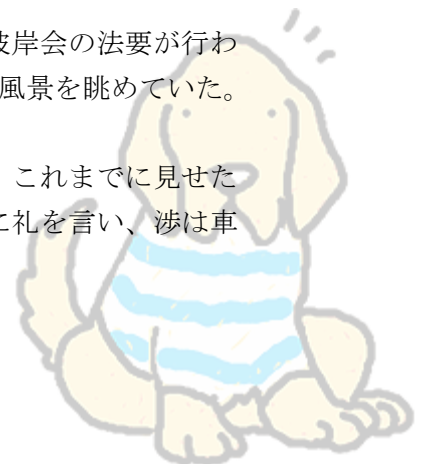
弟が、のんびりと言った。

新幹線の発車時刻からすると、渉は十時には辞去しなければならなかった。駅まで車で送ってくれることになり、寝起きのジェームスも、同乗した。

駅に着くまで、ジェームスは再び眠っていた。寺院では、どうやら彼岸会の法要が行われているらしい。ゆっくりとジェームスの体をなでながら、渉は窓外の風景を眺めていた。

「じゃあな。ジェームス。元気だな」

駅に着き、ドアを開けたとき、ジェームスは目を覚ました。そして、これまでに見せたことのない表情で渉を見つめた。その目を振り切るように、早口で弟に礼を言い、渉は車のドアを閉めた。



いったい何が言いたかったのだろう。渉は思案したが、適切な答えが浮かばない。もう二度と会えない別れの寂しさでも、死期の迫った憂いでもない。妙にさばさばとした、甘えも迷いもない、乾いた表情だった。あんなジェームスは初めて見た。

駅ビルで、友人やお世話になっている先輩への土産を選んでいると、渉はようやく、八戸にやって来た実感がわいてきた。サバだらけだな、と思った。観光も何も出来ず、ジェームスに会いに来ただけの街、八戸。もう二度と訪れることのない街。渉は、少し残念に思った。土産はなかなか決まらない。

急にめまいがして、渉は立ち止まった。

その時である。ジェームスの浮かべた表情の意味が、はっきりとした言葉で伝わってきた。

「俺も、人間に生まれたかったよ」

そうすれば、もっと一緒にいられたのになあ。

思いも寄らない言葉である。だが、あの表情には決して、後悔の気持ちはうかがえなかった。そのことが、渉には不思議だった。

そうか。ジェームスは、きっと一歩、前へ踏み出すことが出来たのだ。待ち受ける死に向かって、心の準備をするために。

渉はようやく、気づいた。八戸への旅は、ジェームスの旅と重なっていたのだ。

決して後戻りの出来ない、彼岸への旅路。その道中であって、渉との束の間の再会は、ジェームスにとって不可欠な風景だった。ジェームスは少し寄り道をして、小便をし、渉に別れを告げ、そして再び歩き始める。

来年の春までには、ジェームスは旅を終えているだろうか。彼岸へと、渡りきっているだろうか。安らかに渡ればいいな、と渉は願った。

「俺の分まで、がんばってくれ。じゃあな」

ジェームスの言葉が、また伝わってきた。

サバの街で、さばさばした表情のジェームス。

本当に、サバだらけだ。何だか愉快的な気持ちになり、渉はもはや迷わず、土産をサバに決めた。

